

## 明治の東京—樋口一葉の小説を視座として—

### 菅 聡子

近代日本文学研究に、文化記号論の一つとして都市論が導入され、定着したのは1980年代である。それに先立ち、この方法を先駆的に実践してみせたのがジャン・ジャック・オリガス「蜘蛛手」の街——漱石初期の作品の一断面（『季刊芸術』1973・1）であった。ここでとりあげられた作品は森鴎外「舞姫」（1890）と夏目漱石「倫敦塔」（1905）で、それぞれ19世紀末のベルリン、20世紀初めのロンドンを舞台としている。鴎外・漱石がベルリン・ロンドンという（近代都市）を見る視線は、そのまま明治日本の東京へと向けられることになる。文章表現の分析によって、それぞれの主人公が国際的近代都市へ向けた視線それ自体を構造化してみせたオリガス氏のこの論文は、近代日本文学研究における都市論の定着に、大きくかつ積極的な影響を与えたと言える。

江戸から明治へという時代の変化のなかで、もっとも劇的に変貌したのが「東京」という都市であることは言うまでもない。しかしその変貌は、一挙になされたわけではない。明治政府の都市計画（と言っても挫折続きではあったが）によって新しく建設された、まさに（西洋近代）を模倣し体現する地域と、その周縁に隣り合う農村地域とが甚だしい差異のままに同時に存在したのが明治初年代の東京である。むろん、（近代）の領域は膨張の一途にあり、都市部はその周辺地域へと拡大を続けた。

本発表でとりあげる明治20年代（1887～1896）の東京には、明治日本が国民国家として自己形成していく側面と、江戸時代以来の価値観が残存する側面とが混在し、種々の価値観や文化の交錯が見られる。日本の（近代）を考えるうえで、この明治20年代はもっとも興味深い時期と言える。後に超軍国主義へと陥る近代日本の歩みの基点がここにある、と言っても過言ではない。

ここでは、とくに女性作家・樋口一葉の小説を視座として、明治20年代の「東京」を読み解いてみたい。後述するように、一葉は女性という性に対する抑圧が強化される明治日本において、まさに女性の視点から、明治近代の歪みや近代から疎外され排除される存在を描き出すことに成功しているからであり、同時に、東京で生まれ、二十四年の生涯において一度もその地を離れたことのない一葉の作品には、とくに東京の下町を中心とした地名の喚起力が豊かに機能しているからである。それは単なる風俗描写や土地に対する叙情的な感情にとどまらない。一葉の小説には、「東京」の地名を一種のインデックスとして、明治近

代の構造それ自体へと迫る視線が、まさに小説の語りの構造として組み込まれている。以下、明治初期における都市「東京」の成立と、国民国家形成という観点から明治二十年代について簡単にふれ、樋口一葉の小説テキストの紹介へと移りたい。

## I. 明治の東京

### I-1 「東京」成立の概観

江戸全盛期である天保期（1830～44）に約130万人を超えたとされる江戸の人口は、明治5年（1872）にはその44%の58万人弱に落ち込んでいる。それが再び130万人に復帰するのは明治22年（1889）頃である。この人口落ち込みの原因は、徳川幕府崩壊に伴う武家地の荒廃であり、残った人口の大半は町人であった。明治維新によって成立した新政府が行った都市政策の初めは、武家屋敷跡地を桑茶畑にする300万町歩開墾計画であった。山の手一帯は無償で開墾者に貸し付けられ、赤坂から渋谷に至る現代の青山通り——現在の東京で、もっともスタイリッシュで「お洒落」な通りの一つ——は見渡す限りの桑畑に変身したのである。一方、銀座には煉瓦街が建設された。完成をみたのは明治10年で、当初は失敗作として酷評されたが、明治20年頃から、東京を代表する商店街として発展の一途をたどった。大通りの左右約50メートル間隔で据えられた「ガス灯」は、まさに文明開化の明かりであった。この銀座煉瓦街には明治10年代前半から新聞社が進出し、ジャーナリズムの街としても機能した。明治14年の時点で、108社の新聞・雑誌社のうち、50社が銀座に集中していたという（『東京府統計書』1881）。また、明治10年代には、「市区改正計画」や「官庁集中計画」が代表する都市計画案が芽生える。これらは、政治情勢の影響を受けながら、紆余曲折を経て、明治20年代以降、一定の成果を見ることになる。

明治21年（1888）には、現在の山手線の内側の市街化がほぼ達成される。居住地と住民の階層が密接な関係にあることは言うまでもないが、山の手には官吏・軍人・勤め人が集中し、下町には商人など江戸以来の町人が住んだ。さらに、土地を失い故郷を離脱した下層農民は、人力車夫や工場労働者、日雇い、あるいは行商人となって下町の貧民街に流れた。彼らを「細民」と呼ぶが、細民たちの生活の実状と困窮をルポルターージュしたのが松原岩五郎の『最暗黒之東京』（明治26）であり、横山源之助の『日本之下層社会』（明治33）であった。

また東京は教育の中心地でもあった。服部撫松による『東京新繁昌記』（明治7）は、「学校」の章から始まっている。明治5年の「学制頒布」を背景に、服部は「世の繁華」は

「文化の繁華」によってもたらされる、その「繁華」の基は「教育」であり、「東京」は明治日本の教育の「枢軸」である、と記す。「学制頒布」は学問による立身出世、という幻想を明治の若者に与えたが、その実践の場が東京であった。明治10年代の終わりには、神田一ツ橋に東京大学の法理文三学部が、本郷には医学部、虎ノ門に工部大学校、駒場に駒場農学校があり、やがて本郷に統合されて帝国大学となる。ほかに、一ツ橋の外国語学校、お茶の水の東京師範、女子師範（現・お茶の水女子大学の前身）、市ヶ谷の陸軍士官学校など、複数の官立校が国家有用の人材養成機関として設立されていた。また、慶應義塾や東京専門学校（のちの早稲田大学）などの私立学校も、特色ある教育で知られていた。東京には多くの学生たちが明治のエリートたることを夢見て集まったが、それは一方で、教育や学歴という新しい評価軸と階層差別をもたらし、この新しい価値の体系から排除され疎外される存在を生み出した。

ちなみに、『東京新繁昌記』は『江戸繁昌記』を模した風物誌で、当時大変な売れ行きを示した。これがいわゆる「繁昌記物」の流行を呼び、明治10年にかけて続々と複数の「繁昌記」が出版された。

## I-2 明治20年代（1890年代）の意味

1868年の明治維新以来、混乱の中にあった明治日本の国内情勢は、明治10年代のうちに徐々に落ちつき、20年代に至って、本格的な国家整備の段階に入った。明治22年（1889）「大日本帝国憲法」発布、23年（1890）第一回衆議院議員選挙、「教育勅語」発布、第一回帝国議会の召集、24年（1891）日本鉄道の上野―青森間が全線開通、26年（1893）出版法・著作権法公布、文部省が儀式用歌（「君が代」等）を選定公示、という歴史年表が如実に示すように、この時期、明治日本は西洋的近代化を大前提としつつ、国民国家としての自己形成を進めた。同時に、中央集権ならびに近代的天皇制国家の実現のため、さまざまな形で人々は「国民」として教化され始めた。それは、天皇の行幸、君が代の成立、万歳三唱等のパフォーマンス、天皇のご真影の全国各学校への下賜等々、聴覚・視覚・動作、といった種々の身体的体験を通じて学習された。そしてこの時期、日本人に初めて明確に国民意識を抱かせ、ナショナリズム昂揚の契機となったのは、1894～95年の日清戦争である。この戦争の勝利に際して、1895年5月30日に行われた天皇の凱旋イベントは、最初の大々的な国家イベントであった。大本営が置かれていた広島から東京に至るまでの最寄り駅で熱烈な国民の歓迎を受けつつ、天皇は東京に「凱旋」する。この凱旋イベントについては、後に一葉の日記の叙述を材料として詳しくふれることにする。

東京という都市においても、明治20年代は一つの画期である。さきにふれた「市区改正計画」が、明治21年8月「市区改正条例」として公布され、翌22年には市区改正委員会による最終案が公示された。霞ヶ関と日比谷を中心とする地区には官庁街が、丸の内・大手町地区には三菱を中心とする新しい経済の中心が誕生した。ちなみに、日比谷公園の開園は明治36年、帝国劇場の開場は明治44年である。東京は徐々に「帝都」としての相貌を整えつつあった。なお、これらについては藤森照信『明治の東京計画』（岩波書店、1982）に詳しい。

では、文学の領域において、明治20年代はどのような意味を持つのだろうか。坪内逍遙『小説神髓』（明治18～19）と二葉亭四迷『浮雲』（明治20～22）の登場の一つのメルクマールとしてとらえるならば、明治20年代が日本における近代文学の成立期にあたることは疑いようがない。さらにこの時期を特徴づけるものは、出版機構の発展・確立である。近代的出版企業を象徴する出版社・博文館が創業されたのも明治20年（1887）であった。岡野他家夫『日本出版文化史』（春歩堂、昭和34）所載の「明治以降 主要雑誌創刊年表」によれば、明治20年代だけで130冊にもぼる雑誌が創刊されている。また明治22年には、内閣印刷局によるマリノニ輪転印刷機輸入を先例として、ロール印刷から輪転印刷への移行が起こり、同時に洋式製本術の普及により活版印刷が支配的となった。製紙産業がめざましい発展をとげるのもこの時期である。作品史上では『小説神髓』の洗礼を受けた近代小説が登場し、一方、経済的には出版機構が整備され、さらに学校教育の普及がいわゆる近代的読者を生み出しつつあった。

この時期の小説は、多かれ少なかれ、「近代」をめぐるさまざまな視線によって構成されている。ここでは、「18～19世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」というシンポジウムのテーマに添い、「東京」という場所、都市空間を視座として、小説テクストを読んでみたい。この作業は同時に、「都市空間」を読む、という双方向性を生むことにもなるだろう。

## II. 表象としての街―一葉テクストの視線

### II-1 女性作家・樋口一葉

現在、女性作家・樋口一葉の名前を知らない日本人はいない。2004年に発行された新札のうち、5000円札の肖像に女性として初めて選ばれたからである。「日本の文学史上有名な女性作家は？」と尋ねられれば、ほとんどの人が「紫式部と樋口一葉」と答えるだろう。しかし、その理解はイメージ先行にとどまり、彼女の小説の真の意味を知る人は少ない。一方、研究上においては、樋口一葉はも

つとも研究の進んだ近現代作家の一人である。その意味で、すでに樋口一葉は「カノン」であるとも言える。彼女の存在は、後代の女性作家にとっては抑圧として機能する側面もあり、「書くこと」をめぐるジェンダー・イデオロギーの交錯を見るのに興味深い対象でもあるが、ここではその点にはふれない。

樋口一葉は、明治5年（1872）、東京の現・千代田区内幸町に生まれた。父・則義、母・たき、兄が二人、姉が一人、妹が一人いる。本名は奈津子。最終学歴は小学高等科第四級卒業で、同時期の女性作家のなかにあつては、むしろ珍しい低学歴である。彼女は幼い頃から読書好きで進学も希望していたが、「女に学問は必要ない」という母の意見により、学校教育の道を断たれた。彼女の教養は、その後通った和歌の塾で学んだ日本の古典文学に多く拠っている。両親はもともと山梨県出身の農民であったが、出世を夢見て故郷を捨て江戸に出て、同心株を買って「士族」の身分を手に入れた。江戸幕府瓦解の後には、混乱をうまく生き延び、明治新政府のもとで、なんとか下級官吏の職に就いた。しかし、長男が若くして病死し、気落ちした父親も事業の失敗などもあって病没した。この時点で、次兄は樋口家の籍を離れ、姉は他家に嫁いでいたため、次女である一葉が樋口家の戸主となった。女性でありながら戸主である、というのは、長子男系相続を基本とする近代日本の家父長制度においては、例外的な位置である。

父親の死後、定職も財産もなかった樋口家は没落の一途をたどり、ひどい困窮状態に置かれた。そのなかで、一葉は小説家となることを志し、いくつかの短編小説を発表したが、なかなか世間では認められない。生活状況の悪化のなか、母・一葉・妹の女三人の樋口家は、下谷龍泉寺町（現・台東区竜泉）に転居し、小さな雑貨屋を開いた。下谷龍泉寺は、吉原遊廓周辺の町で、人々の生活は貧しく、多く、遊廓に経済的に依存していた。一応、士族あがりの下級官吏の娘で、通っていた和歌の塾では上流階級の女性たちとのみ交際していた一葉にとって、この地で下層社会を生きる人々と直接交渉を持ち、遊廓で身を売る女性たちの実状を目にしたことは、想像を超えた体験であり、彼女の社会認識を大きく深化させた。彼女がこの地で目にしたことは、同時代の他の女性作家が決して見ることのない明治日本の現実であった。

明治近代は、家父長制度とそれを補完する良妻賢母主義教育によって、女性を家制度の内部に所属する女性と外部に排除される女性、すなわち、母・妻・娘と呼ばれる女性と性的欲望の対象としてのみ認知される娼妓（＝娼婦）とに分断した。娼妓の階層においても、公娼と呼ばれる合法的娼婦と私娼と呼ばれる違法娼婦、というように女性たち

はさらに階層化された。そして、各階層間において対立し、憎悪しあうような関係が形成させられた。これが、明治近代がとった性支配の基本的枠組みである。そのなかにあつて、一葉は、女性を分断する境界を越境し、階層をこえて、家制度の内部を生きる女性たちも外部に排除された女性たちも同じ女性であり、明治近代によって性的に搾取され抑圧される存在であることを理解した。この認識が、明治28～29年（1895～96）のほぼ一年余りに集中的に発表された、『大つごもり』（明治27）『たけくらべ』（明治28～29）『にぎりえ』（明治28）『十三夜』（明治28）『わかれ道』（明治29）等の傑作の数々に結晶したのである。

さらに、一葉は、44冊にものぼる日記を残した。これは、彼女が女性作家としてどのように成長していくか、あるいは執筆状況などを知ることができるのみならず、明治近代を生きる一人の貧しい女性の日常生活を知る上でも、第一級の資料である。

一葉の人生はわずか二十四年に過ぎないが、小説や日記を通して残された彼女の視線がとらえた明治20年代の日本は、日本の近代化が内包していた種々の矛盾や弱者の切り捨てや女性への抑圧、と、さまざまな問題を露呈させている。その意味で、一葉はまさに最初の「近代」女性作家であったと言える。続いて、『たけくらべ』における吉原遊廓という空間の意味、『わかれ道』に見られる地名の喚起力、さらに一葉日記に記された日清戦争における明治天皇の凱旋イベントについて論じたい。

## II-2 一葉テキストと明治の東京

### 1) 『たけくらべ』『わかれ道』を例に

『たけくらべ』は雑誌「文学界」に明治28年1月から翌年1月まで断続的に掲載された、樋口一葉の最高傑作とされる作品である。女性作家・樋口一葉の名を一躍有名にしたのは、幸田露伴・斎藤緑雨・森鷗外による合評「三人冗語」（「めさまし草」明治29・4）の『たけくらべ』評である。とくに鷗外による「われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくことを惜しまざるなり」との激賞は、同時代のみならず後世に至る一葉の評価を決定づけた感がある。

『たけくらべ』は、夏から初冬への季節の移ろいのなかで、吉原遊廓周辺の町・大音寺前を舞台に、13歳から14歳の少年少女を主人公とし、二度とは戻ってこない〈子ども達の時間〉を見事に描き出している。大黒屋の美登利、龍華寺の信如、田中屋の正太郎を中心に、頭の長吉や滑稽者の三五郎など、それぞれ、親や屋号を背負って呼ばれる子ども達は、いずれもその職業を継ぐことを前提とされているのであり、学問による立身出世などという近代の「大

きな物語」が幻想に過ぎないことをその呼称をもって示している。物語の中心である美登利と信如の間で交わされるそこはかたない思慕は、私たち読者の惜春と感傷を誘引してやまないが、「大黒屋」、すなわち遊廓の大きな娼妓屋で将来の娼妓として暮らす美登利と、「龍華寺」のあととりとして将来の僧侶として育つ信如の所属する場所は、現在もそして将来も決して交わることはないものとしてあらかじめ決定されている。物語の終わり、信如は美登利をひとり残してこの町を去るが、この二人の別れは最初から決定されていたことだったのである。

先述の鷗外の評が「たけ競出で、復た大音寺前なしともいふべきまで、彼地の「ロカアル、コロリツ」を描写し」と指摘しているように、『たけくらべ』においては、作品の舞台となっている大音寺前、吉原遊廓という「所から」（＝土地柄）と作品の構造自体が深く関連し合っている。冒頭から連ねられる「大門の見返り柳」「三嶋神社」「大音寺前」「かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋」「大鳥大明神」と言った土地柄を示す記号の数々により、『たけくらべ』は典型的な下町を舞台にすると考えられるが、明治20年代の大音寺前は、東京の市街地が郊外の農村部と交錯する縁辺地帯であった。膨張する都市、前近代的な半農地帯、明治近代の性支配を象徴する吉原遊廓、というベクトルの交差が、作品の構造と重なり合っている。

たとえば、作中、町の子ども達の勢力は、鳶の頭の子・長吉を大将とする「横町」組と高利貸「田中屋の正太郎」をリーダーとする「表町」組に二分されている。「田中屋の正太郎」は「家に金あり身に愛敬あり」、加えて、公立学校に通い「学問が出来おる」。すなわち、彼は「学校」「学問」という近代の価値観によって作られた、子ども達の新しい序列を背景にした新興勢力なのである。一方、「鳶の頭の子」長吉は、その共同体の「男達」（それも荒くれ者たち）をたばねる「頭」（＝頭領）の子である。乱暴者で、腕力ではかなわない相手はいない。だが、勉強は出来ない。そこで、正太郎の「学問」に対抗すべく、自分と同じ私立学校に通い、学校で一番勉強ができる「龍華寺の信如」を自分の側につけるわけだ。「龍華寺」は伝統的な地域共同体のもう一つの中心である。つまり、「表町」は近代の新しい序列や経済システム、それに基づく人間関係を象徴し、「横町」は古くからの地縁や共同体の絆を象徴する。両者の対立は新旧二つの対立であり、まさに日本の近代化のプロセスのなかで生じるきしみを、この子ども達の対立もまた象徴している。そして、二つのグループが「喧嘩」という形で衝突するのは、地域の古くからの農耕神である「千束神社」の祭、すなわち（祝祭）の夜においてであった。

さて、吉原周辺の町、大音寺前においては、人々の経済生活は吉原遊廓に依存している。この作品では決してその内部が描かれることはないが、厳然として存在し続ける闇の空間として、そして周囲の人々の生活を成り立たせていると言う形で支配が及んでいる（実はこれは表層のことに過ぎないのだが）吉原遊廓とは、一体どのような場所なのか。

元和3年（1617）、幕府は葺屋町（現・日本橋人形町付近）に江戸市中の遊女屋を集め、一大傾城町を造った。この地にヨシが繁茂していたことから葺原、転じて吉原と呼ばれるようになった。明暦3年（1657）に大火のため浅草山谷（現・台東区千束）に移転し、以後前者を旧吉原、後者を新吉原と呼ぶ。明治の吉原は後者のことである。吉原は周囲を大下水の流れる溝で囲まれている。水はどす黒く濁った下水であるが、遊女たちがお歯黒の水を流したためとも言われ、お歯黒溝と呼ばれる。どす黒い溝水で周囲を囲われた空間、これこそ吉原という場所を象徴していると言える。この水は明暦の大火の教訓としての防火用水であると同時に、遊女の逃亡を防ぐためのものでもあった。お歯黒溝には各町ごとに廓外と廓内をつなぐ門と跳ね橋があり、番人のいる番小屋があった。この橋は中から外へと下ろすことしかできない。この跳ね橋が上げられてしまえば、吉原は完全に隔離された空間となるのである。この閉ざされた空間のなかで、女性たちは休み無く身を売り、逃亡を企てれば壮絶なリンチを加えられ、病気で使い物にならなくなればそのままうち捨てられ、死んでしまえば近隣の浄閑寺（別名・投げ込み寺）に死体が投げ込まれる。吉原の女性たちは多く、家族の貧困を救うために身を売っていたが、明治近代の女性観（家父長制度・良妻賢母主義による）は身を売る行為を汚れたものとしたため、家族は娼妓を恥じた。家のために身を売り、しかし家族からは死体すら引き取ってもらえない。女性をとりまく二重拘束が娼妓たちの身体を通して露呈する。

作中、ヒロインである「大黒屋の美登利」は、売れっ子的花魁である姉の威光で、大人たちや友人達からちやほやされている。のみならず、姉以上の美人とされる彼女は、将来有望な娼妓の卵である。だが表面的な待遇とはうらはらに、人々は真実のところでは将来の娼妓、金銭と交換に身を売る女として美登利をとらえ、侮蔑のまなざしをそそいでいる。吉原遊廓周辺の町、大音寺前を舞台に、明治社会の暗部が一つの縮図として展開されているのである。

次に、具体的な地名の喚起力の例を『わかれ道』の設定に見てみよう。明治29年1月、雑誌「国民之友」に掲載された『わかれ道』は、仕立物で生計を立てるお京と、傘職人の吉三という二人の別れを描いた作品である。仕事を

持ち自立し、長屋に一人住まいの独身の女性、というお京の境遇は、当時の女性としては珍しい。よって、その美貌とあいまって、周囲の視線は彼女がいつまでもこの仕事屋を通すわけではあるまい、いずれは妾奉公などに出るのだろう、と思っている。一方、吉三は十六歳だが十一歳ぐらいにしか見えない青年で、「一寸法師」と差別的なあだ名で呼ばれている。お京の部屋に親しく出入りしており、彼女を姉のように慕っている。捨て子で、角兵衛獅子をしていたところを傘屋の隠居に拾われた彼にとって、現在の生活は望みうる最高のものである。だが、お京は「出世」を望んでいる。そしてそれが妾奉公という形で作品内に現れるとき、男の出世とは異なって、女の出世がすなわち性を売る妾奉公であるという、明治社会における女性の性をめぐる視線があらわになる。お京にとっての妾奉公は、彼女の主体的な選択であるかのように見えるが、作品は決してそれを肯定的に提示するのではなく、最後に吉三の吐く「お京さん、後生だからこの手を放しておくんなさい」という拒絶の言葉によって、厳しく相対化されている。

吉三は今まで「親類らしい者に逢ったこともない」「母親も父親もからっきりあてがない」孤児であった。彼が唯一記憶しているのは、「角兵衛の獅子を冠って歩いた」ことだけである。彼は「新網」に住む子供であった。このことは、現在の私たちにとっては何の喚起力も持たない。なぜなら「新網」という地名はすでに消失しているからである。しかし同時代の読者にとっては、「角兵衛獅子」「新網」という二つの記号によって、この吉三の境遇が鮮明にイメージされたはずである。「新網」は横山源之助『日本之下層社会』に言うところの「三大貧窟（＝スラム）」の一つで、現・港区麻布にあった極貧の者たちの住む地域であった。そこには「大道講釈・かっぽれ・ちょぼくれ・かどつけの輩」といった、「一般世人たちに軽んぜられながらもお鼻屑を受けて芸を売る」芸人たちが集まっていた。

「角兵衛獅子」は本来は正月などに各地を渡り歩いた祝福芸であった。だが明治のこの時点ではすでに本来の形態は変容し、貧しい人から買い取った子供や、孤児、さらった子供、また金銭で貸し出された子供などを、過酷な稽古で仕込み興業をするあくどい親方がはびこっていた。曲芸をするためには身軽で骨が柔らかくなくては、などと言って、子ども達はろくに食事も与えられず、酔を飲まされたりした。「角兵衛獅子」と「新網」という二つの記号によって、学問による立身出世からは最初から排除されている吉三の、しかし現在の境遇を最高の出世だと考えているその背景、お京を疑似家族としてその絆を切望する思い等を同時代の読者は理解することができたと思われる。お京らの住む長屋も下町の裏通りにあり（具体的な地名は示され

ない）決して豊かな場所ではないが、吉三の背負う記号は、さらなる下層社会の存在が作品の背後にあることを示している。

以上、二つの作品を例に、地勢と作品の構造・価値観の交錯が重ね合っているもの、また具体的な地名の持つイメージの喚起力について簡単にふれた。次に、一葉の日記を題材に、国民国家形成の過程において、大々的に開催された明治天皇の〈凱旋〉イベントについて見ることにしよう。

## 2) 一葉日記「水の上」（明治28・6・1）にみる〈凱旋〉イベント

「御還幸奉迎又ハ拝観の為め当日まで近県より上京したる者と東京市下の奉迎者とを概算すれば少くも30万人以上に及びたるならん」（『読売新聞』1895・5・31）という明治天皇の〈凱旋〉は、T・フジタニ『天皇のページント』（NHKブックス、1994）が「記憶の場」と呼ぶもの、すなわち「天皇を中心とする国家の過去を想起させる記憶、あるいは時の国家的偉業を記念し、その将来の可能性を象徴的にあらわす記憶を構築するうえで役立つような、物質的な意味の担い手」として機能しうる、まさに国家的イベントであった。その意味で、この〈凱旋〉イベントは人々を〈国民〉として教育し、〈国民〉としての自覚を持たせるための最大の機会であったと言える。

東京への〈凱旋〉が果たされたのは5月30日、新橋停車場に到着し、ここで汽車から馬車に乗り換え、行列を整えて凱旋還幸のパレードが始まる。「戸々国旗を出し、軒提灯など場末の賤がふせや（＝極貧の者の住居）まで」下げられ、「正午過ぎより花火の音絶え間ない祝祭気分で沸き立つ市中を行進し、日比谷の凱旋アーケードをくぐってから、宮城前広場を通り、最後は二重橋から宮城（＝皇居）へ入るというルートであった。

この〈凱旋〉イベントの最大の目玉は、日比谷の仮議事堂前に建造された巨大凱旋門であった。橋爪紳也『祝祭の〈帝国〉』（講談社選書メチエ、1998）によれば、日比谷に突如として現れたこの巨大な凱旋門は、東京商人有志奉迎会により3000円に及ぶ費用と1000人もの労働者を投じて建造され、長さ約110メートル、中央部分に高さ30メートルの塔を配し、杉の葉で覆われたアーチには「聖駕奉迎」という言葉が花瓦斯（＝装飾用の瓦斯燈）や草花装飾で彩られ、長さ十尺幅六尺の赤い幟には「皇威発揮」「国光宣揚」と書かれていた。だが最大の特徴は、この凱旋門があくまで仮設であり、イベント終了後、数日のうちに解体されるものであったということである。ベルリンのブランデンブルグ門、パリのエトワール凱旋門などを引き合いに出すまでもなく、この日比谷の凱旋門は、西洋のそれを模倣したハリボテなのである。

一葉は、〈凱旋〉パレードの当日には見物に出掛けていない。彼女が間接的にこの〈凱旋〉イベントに参加するのは、この翌々日、すなわち明治28年6月1日、奉迎の目玉として建造されていた「凱旋門」が早くも取り壊されることを聞き、急いで見物に出掛けたときである。この日の日記には、二つの相反する表象が現れている。一つは、「上の青山より還御」（注・実際は皇后であった）に遭遇し、あわてて道の端に車を乗り捨てひかえる人々の長く長く続く列を切り取る一葉の視線である。この長い長い列を一葉は「絵巻にして残さまほし」と記す。ここで彼女は『源氏物語』「葵」に描かれた賀茂の祭の齋院の御禊式の行列を見物する物見車の情景を想起している。「加茂のまつり」の「古代」へ思いをはせつつ眼前の場面、すなわち（現在）に目をやると絵巻にして残したいほどの優雅さである。そして眼前の〈現在〉の場面を「百年の後」の人々に見せたならば、「明治のよの古雅なるさま」と讃えられるであろう、と言う。「加茂のまつり」の「古代」と「明治のよ」すなわち明治の〈現在〉が重ねられ、それはさらに一つずつずらされて、明治の〈現在〉と「百年の後」という時間の連続性が示される。行列空間という視覚的にとらえられた〈長さ〉は、同時に時間の連続性を表象する。すなわち、ここで一葉の視線によって切り取られた行列空間の表象——正確には天皇の通過を待つ人々によって作られた「見物」の列——は、天皇制を守護する役割を持っていた賀茂の神の祭りの列と重ねられ、それは〈雅〉によって貫かれる天皇の御代の時間の永続性をことほぐものとなっていく。

しかし同時に、一葉の視線がとらえるもう一つのものは、「もはや取り崩しに取りかかりりとおぼしく取りおろしたる杉の葉などこかしこに山とつまれ」た凱旋門の残骸である。永続性の幻視と取り崩された凱旋門の残骸。この相反する表象の併存は、まさしく明治近代の行方を予告するかのようである。

樋口一葉が「娼婦」や貧窮に苦しむ人々、家制度のなかで抑圧される女性たちをモチーフとして小説を発表したのは、日清戦争の戦勝による資本主義経済の確立と産業革命の結果、都市空間に出現した「細民」が社会問題化する時期でもあった。それらは「東京」という都市を舞台としつつ、その「東京」の片隅においやられ、近代の価値体系から排除されていった弱者の視点から描かれたものである。一葉自身は、日記その他の記述から明らかなように、一方では「国民」としての自己を見出し、しかし一方では明治近代への懐疑の視線をそなえる複雑な「個」であった。今回はそのごく一面を紹介するにとどまったが、女性作家・樋口一葉の存在がフランスの日本学研究においてもより広

く認知されるきっかけとなれば幸いである。